



プロローグ

篠原琢磨「母さん…何時も話していた優理子さんだ…」

篠原きよい「まあ～ようこそ～綺麗な方ね～琢磨には勿体ない…（笑）」

宇佐見優理子「初めまして…」

母きよいは、ソワソワとお茶を入れたりケーキを切り分けたり、甲斐甲斐しく動く。

琢磨「母さん、落ち着いて座って…」

優理子「お手伝いしましょうか…？」と立ち上がりかけた…

きよい「ふっ、大丈夫…終わりましたから…」とやっと席に着いた。

きよい「優理子さん…出身は？」

優理子「はい、新潟です…今は都内にアパートを借りています…」

琢磨「優理子さんは、ご両親がもう居ないんだ。」

きよい「そう…寂しいわね…家も母一人子一人…」

優理子「慣れました…」と寂しそうな笑みを浮かべる。

琢磨「母さん、優理子さんと結婚の約束をしたんだ。」

きよい「まあ～素敵じゃない。」

優理子「お世話になります。」

きよい「いつ？式は…」

琢磨「ロスの学会から、帰って来て早いうちに…」

きよい「優理子さん、お勤めでしょう？」

優理子「はい、この結婚を機に退職するつもりです。」

きよい「我が家へ嫁いで下さるの？」

琢磨「そうだよ。母さん…仲良くやって欲しいな～～」

きよい「勿論ですよ～～お喋り相手が出来るわ。」

優理子「よろしく願います…お義母様。」

ひとしきり、お喋りをした後、琢磨は明日ロサンゼルスに出発するため準備をする。

優理子も勿論手伝ってくれる。

琢磨「一週間…寂しいだろうけど…」

優理子「お義母様と、待っています。一週間なんてすぐです（笑）」

琢磨「安心した（笑）」

それが、永遠の別れになろうとは、二人とも夢にも思わなかった…

琢磨は目覚めた。

夕べの幸せを反芻する…

甘い香りが鼻孔をくすぐり、柔らかな温もりが…

琢磨は深呼吸しながら『ああ…良い天気だ〜〜。よし！頑張るゾ〜〜』と心の中で気合いを入れる。

アナウンスの音がいやに響く…

空港は何処もそんなもの…

優理子「あなた…気をつけてね。」

琢磨「ああ…行ってくる。母さんのこと…頼むよ。」

優理子は琢磨がすべてだ。

飛行機が離陸し見えなくなるまで手を振る。

優理子『ああ…一週間か…』と思いながら…左手薬指にはめた指輪を慈しむように見つめた。

〜〜◇〜〜

ロスでの会議が始まった。

物理学者である琢磨、世界各国から関係学者が集まっている。

テーマは「船の遭難事故多発対策」である。

事故にあったすべての船が嵐の中…空間に出来た亀裂のようなものの中に消えていったという目撃情報があり…磁気嵐に関係しているのではという仮説がクローズアップされたのだ…。

北極や南極ではオーロラが連日、大規模な姿を現しているとの報告も寄せられていて、それが広がりを見せているという。

磁気嵐と遭難事故の因果関係が話し合われた。

「オーロラの発生と磁気嵐の因果関係はよく言われる…それと船の遭難とは関係ないように思うが…」

「空間に亀裂が出来るとは？どういうことなのでしょう…」

「時間論オーソリティーの篠原教授は、どう思われているのですか？船が異次元に消えたのではと噂されていますが…」

琢磨「そもそも、異次元とは…存在するという確証がないものです。調査のしようがありません。」

「しかし、こう…頻繁に発生すると…対策を立てるために、この会合は開かれたのだから…」

琢磨「そうですね〜、まず磁気嵐とは…太陽面の活動によって放出される帯電粒子が地球に影響し、デリンジャー現象が起きる。それによりオーロラが発生するとされます。しかし何故、磁気嵐と空間の亀裂、イコール異次元なのか？また、異次元と時間は直接関係がありませんが…」

「えっ？異次元は時間の流れと密接に関係していると…」

琢磨「関係はしていますが…異次元が存在すること自体不明なのですよ…私の研究する時間論はあくまでも、ここ3次元とされるこの次元内のことです。」

「そうですか…」

琢磨「各船に注意して貰うほか対策はないのではないのですか？この会議に呼ばれたことを不思議に思っているのです…」

「国連が招致したのです…仮説でもいい、何か報告しないと…」

琢磨「仮説なら…異次元ではなく、どの時間に飛ばされたかですね…もっと想像するなら空間の亀裂は『時空間ポケット』とでもいうものです。実際見たわけではないので信憑性に乏しいですが…」

ロスでの会議は、結論や対策が出ないまま終幕した。
一週間の予定が二日で終わり、琢磨は帰国の途についた。

ロス発成田行きのジャンボ機は日付変更線を通過しようとしていた…
琢磨は、その辺りで眠りに落ちた。
どの位経った頃だろう、まどろんですぐかも知れない。
いきなりガクンという機体の震動に目を覚ます…
静かだが緊迫した機内のアナウンスが流れ、シートベルト着用のサインが出る。
次第に機体が揺れ始めた…ダッチロール状態になったようである。

『皆様、暫く揺れます…シートベルトを着用して、ご辛抱下さい…』

同じ時、操縦室では機長達が操縦桿と格闘していた。
前方に突如、嵐のような渦巻きが発生し、その中心にポツカリと暗黒の闇が口を開けているのである。
合わせて、その闇に吸い込まれるように引き付けられている。
避けようと努力はしてみたものの、操縦桿が効かない…

琢磨は、窓から外を見てみる。
機体は今しも嵐の中に吸い込まれようとしていた。
琢磨『ま・まさか！時空間ポケット？…こんな上空に？』
琢磨の脳裏に、優理子と母きよいの姿が走馬燈のように去来した。
琢磨『優理子〜〜っ』と心の中で叫び、激しいダッチロールのため気を失った…

〜〜◇〜〜

『皆様、大丈夫ですか？この便は嵐の中を無事に抜けました。』と言うアナウンスで琢磨は気付く。
何もなかったような、静かな飛行に戻っていた。
琢磨は、夢でも見たのかと錯覚するほど…
窓の外も朝日が差し込んできている。
しかし、琢磨の心には異変を感じていた。『何かが違う…』

成田に着いたのに着陸せず、上空を旋回している…
それは何を意味するのか？
機長は、管制塔との連絡で違和感を感じた数少ない一人かも知れない。
やっと、着陸許可が出た。
ハッチが開けられ、外を望むと武装した警察官に取り囲まれていた。
乗客達は数台のバスに押し込められ、空港内の一室に監禁されてしまった。

琢磨達と一緒に乗り合わせた乗客は、異変を感じ憶測を話し始めた。

「どうも…ハイジャックがあったようだ」

「違う空港に下りたらしい…」と…

琢磨は、別な原因を考えていた。

琢磨「今日は、何年何月何日だか、教えてくれないか？」と警備に当たっている警察官に尋ねた。

尋ねられた警察官は『何でそんなことを聞くんか？…変な奴！』と言う表情を作った。

警察官「2060年4月〇日だ。」

それを聞いた乗客達は耳を疑う表情だ。

「馬鹿な～」「そんなはずはない」と騒ぎ始めた。

琢磨一人だけ、その事実を受け入れ考え込んだ。

琢磨『50年先に飛んでしまったか～もう…母さんは…居ない…優理子は70を越える老人？』と思い立ち愕然とした。

暫くすると、成田空港の保安部長が警備員と共にやってきた。

保安部長「乗客の皆様、大変ご不便をおかけして、申し訳ございません。今暫く当空港の特別室にご滞在下さい。」と静かな口調だが有無を言わせないと云った感情が含まれている。

乗客「仕事が待っているんだ、早く解放して欲しい！」という言葉が皮切りにあちこちで苦言が飛び出した。

保安部長「まあ…皆さん、静かにして下さい。私も早く皆さんを解放してあげたい…しかし今、機長から事情を聞いているところです。」

乗客「ハイジャックでもあったのか？」

保安部長は、首を左右に振る。

乗客「さっき、警備の人間が2060年と言っていたが…どういうことだ？」

保安部長「仕方がない…その通りですよ。皆様こそ何処からいらしたのですか？」

琢磨が徐に立ち上がり…「2010年の過去からです。」

保安部長「ほう～…機長もそう言っていました…あなたは？」

琢磨「篠原琢磨です。」

保安部長「あ～～あの物理学者の…」

琢磨「ご存じですか？」

保安部長「はい、機長が磁気嵐に遭い、タイムスリップしたと言うもので…当時のことを調べてみたのです。そうしたら…篠原琢磨という日本を代表する時間論を発表した物理学者が居たと…ロスから帰国する際、飛行機と共に行方不明になったと…当時の新聞に載っていました。」

同じ機に乗り合わせた乗客達は、ザワザワと落ち着かなくなる。

乗客「すると…どうということ？」

保安部長「ここは…ご専門の篠原教授に…」と言い、一歩下がる。

琢磨「皆さん…我々は、飛行機もろとも時空間ポケットに吸い込まれ…50年先の未来に飛ばされてしまったのです。」

乗客「そんな…馬鹿な～～責任をとれ～～！！」

それを聞いた他の乗客も同調する。

琢磨「誰にです???旅客機の機長にですか?…これは事故なのです。いいですか?」と窓の外を指差す。

琢磨「他の旅客機を見て下さい…形が少し違うでしょう?それと…空の青さが濃くなっている…そう感じませんか?」

その空の色は、自分たちの居た時代の空色より…濃い青色の空で綺麗と感じたのだ。

時代の流れに反比例するように…

保安部長「その疑問は、私が答えましょう。」

保安部長「20世紀の後半から21世紀始め…温暖化現象で異状気象が騒がれていました。温室ガスが地球の空を汚していたのです。国連が温室ガス排出規制に乗り出し、やっと最近、綺麗な空になり始めました。都会も緑化で昔と全然違うと思います。」

そうなのである。2000年を境に環境破壊に国連が重い腰を上げて、排出ガス規制が始まったのである。

後進国の反発や、先進国でも経済効果の絡みで反対があった。

しかし各地で起きる、異状気象…爆弾低気圧などの言葉も現れ、各地に膨大な被害が出たのである。

そのようなことは、乗客達は薄々知ってはいたが、問題は今の置かれている現状だ。

琢磨「皆さん…どうします?今まで築いてきた人生が霧散してしまったのです。帰ろうと思っても…時空間ポケットは…異状気象によるものと考えられ、ここでは発生しづらい環境になっていると思われれます。…これからここで生きていくことを考えなくては…」

それを聞いた乗客達はオロオロし始めた。

保安部長「そうなんです…こうなりましては…皆さんのことを考えなくてはなりません…当空港の側に当社のホテルがあります、そこを一時提供いたしましょう…また希望があれば仕事の斡旋相談にもなります。ただこれだけは言っておきます。環境や技術の発展がありますので…一からの勉強となります。では、私はこれで…後は係員に相談して下さい。」

保安部長は琢磨のところに来て「篠原教授は、どうされますか?」

琢磨「…取りあえずは…家が残って居るか確認したい…」

保安部長「う～～む…難しいですね…確か、独身でいらっやったと記録に残っていますが…」

琢磨「はい…婚約者がいましたが…行方不明になったのだから…誰か別の人と…」

保安部長「…あまり期待しないほうが…」

琢磨「判っています…」

乗客達は、各々の判断に委ねられた。

警備をしていた、警察官も犯罪がらみでないため撤退。

機長などの航空関係者だけは、事故調査委員会の事情聴取を受けるため足止めされた。

暫くして、厚生労働省の役人と称する一団が到着。

乗客一人一人の氏名・旧住所を聴取した後、カードが手渡された。

日本国発行特別カードと書かれたもの。

役人「このカードは、絶対紛失しないで下さい。…キャッシュカードとなっています。そして、使用する時は素手でないと使えませんし利き腕の指が触れてなくてはなりません…相手に渡したり他人が使おうと思っても認識しないので注意して下さい。…では皆さん、この機械に利き手をかざして下さい、それで認証されます。またこのカードは政府機関で監視しています。監視と言っても使い方を観ているだけですが…犯罪と判断した使い方をされた瞬間から効力が無くなります。」

乗客「どんなことが犯罪と判断されるのですか？」

役人「簡単です。必要以上の高額使用です。あっ忘れまして。あなた方の時代のように紙幣・硬貨というものは、現在ではありませんので…」

琢磨はそれを聞き、『政府の監視下に置かれたと言うことか～～』と憂鬱になった。

乗客達は勇んで空港を出て行った。

しかし、又戻って来るであろう事は容易に想像が付く。

琢磨は、役人に「文部科学省は今も存在しますか？」

役人「勿論存在しますよ。」

琢磨「所在は霞ヶ関ですね？」

役人「はい。そうですが…何か？…」

琢磨「当時…よく通ったもので…」

琢磨も空港を後にした。

カードの使い方は、当時と同じセンサーにかざすだけ、タクシーも屋根がソーラーパネルになっている電気自動車だ。音も殆どしない、地面と車輪の接地する音が微かにするだけだ。

琢磨が住んでいた住所に着くと、景色が様変わりしていた。

何処の家も、樹木があり手入れの悪い家は鬱蒼と茂っていた。

これでは…空き巣にとって恰好の家だろう。まあ防犯設備も発達しているのだろうが…

1軒1軒表札を確認する。

すると（篠原）という家を見つけた。当時と同じ場所であると思われる。

母屋は新しくなっているが…隣接した建物は古いまま…

琢磨は、自分の研究室だと確信した。

しかし…誰が住んでいるのだろう…母一人子一人の母子家庭だったのに…

琢磨の父が一代で築き上げた家、数年前…病気で急逝したのだ。

だから、琢磨が行方不明になったら、後を継ぐ者が居ないはず…

琢磨は、取りあえずインターホンのスイッチを押してみた。

「はい…どちら様でしょうか？」と女の声で返事が返ってくる。

琢磨「篠原琢磨と申します…ちょっとお話が聞きたくて…」

「えっ…」

インターホンを通して、なんか息をのむ雰囲気伝わってきた。

暫くすると…40代後半くらいの男が恐る恐ると言う感じで出てきた。

琢磨「突然、お邪魔します…」

男「…何でしょう…」と訝しげに見つめながら言う。

琢磨「昔…篠原きよいという人が住んでいなかったでしょうか？」

男「きよいは、私の祖母ですが…」

琢磨「えっ…」

琢磨は思い巡らす。兄弟は居ない筈だし…どういうこと？

男「あなた…篠原琢磨さんと申されましたが…どちらからいらっしゃったのですか？」

琢磨は、何処まで話したらいいか迷った。

男「母から聞いたことがある…私が生まれる前、父が飛行機事故で行方不明になったと…その人の名前が、琢磨と言っていました。」

琢磨「優理子…の？」

優理子という名前を聞いて男はビックリした表情になった。

男「立ち話も何ですから…お入り下さい。」

通された客間は、綺麗になっている。

棚の上には、トロフィーや盾が沢山ある。

文部科学大臣賞というのもあった。

名前は（篠原雄馬（ゆうま））となっている。

琢磨は、不思議な何ともいえない嬉しさが湧き上がってくる…

琢磨『優理子…もしかして…お腹に…』

雄馬「どうぞ…おかけ下さい」

琢磨「…有り難うございます。」

雄馬「で…あの…祖母と母の名前をご存じで…篠原琢磨さんと申される…見るからに20歳過ぎくらいの若さでしょうか？…どう判断したら…」

琢磨「雄馬さんと仰るのですね。琢磨に雄馬…実はロスからの帰りの飛行機で事故に遭いました。」

雄馬「その辺は…当時の記録が残っているので、調べれば判るが…何が狙いなんですか？」と猜疑の目になる。

琢磨「飛ばされたんですよ、50年後に！…信じられないでしょうが…時空間ポケットに飛行機もろとも…」

いきなり突拍子のない答えで雄馬は戸惑いと共に、詐欺ではないと感じた。

雄馬「時空間ポケット…50年後…2060年の今年がそうですね～～～」

琢磨「あなたも…物理学を？」

雄馬「はい、父とは違う工学系に進みました。」

琢磨「すみませんが…優理子に逢わせて下さい。」

雄馬「それはできません！」

琢磨「何故ですか？」と気色ばむ…

雄馬「母は、昨年暮れ…死にました。」

琢磨はそれを聞いて、胸が熱くなり涙が溢れてきた。

琢磨『そうだった…50年も経っているんだ…すると73歳の生涯だったのか〜〜〜』

目を真っ赤にしている琢磨を見て…雄馬は「遅かった〜…ず〜〜っと、待ち続けていましたよ。（必ず帰って来てくれる）というのが口癖でした。」

琢磨は、堪えきれなくなって…嗚咽をあげた。

雄馬「又、こうも言っていました。（あの人は優秀な学者です…生きていてくれれば必ず帰る糸口を見つけて帰って来てくれる）と…時間理論に長けた人だとも…飛行機で突然の行方不明…母は時空間ポケットのことも知っていて、タイムスリップしたのだと言っていました。」

琢磨「…」

そこに、古いアルバムとお茶を持って、嫁が入ってきた。

雄馬「妻の詩織です。お父さん…お会いした時…すぐにお父さんと判りました。アルバムに収まっている、お父さんとうり二つですから…」

琢磨「…ううう…ショックです、優理子がもう居ないなんて…（泣）帰りたい…2010年に…」

古いアルバムには、優理子と雄馬の成長記録が綴られていた…

優理子が段々年を重ねていく…

写真の優理子は、いつもスーツ姿だった。

家と息子を守る為、必死に働いていると感じられた。

途中から正視できない状態になった…あまりに哀れで…

琢磨「苦勞かけたね〜〜すまない…」

時間のズレは、こうも悲しみが伴うのか…と改めて思った。

琢磨はひとしきり泣いた後、毅然として「僕は、帰る！！何としても…」

雄馬「私もお手伝いしますよ。…ただ…帰れたとしても…こちらがどうなるか心配だ！その辺の説明が欲しい…」

琢磨は、息子雄馬の心配が手に取るように判る。

琢磨の時間理論では、一人の人間が時間を越え戻った瞬間、未来が大きく変わると言うこと、自分の場合だと雄馬は存在する。優理子のお腹にいたのだから…

だが問題は、周囲の変貌だ。

行方不明になった琢磨が、帰って来て存在した場合の影響である。

又、同乗していた乗務員や乗客のことも考えなくてはならない。

琢磨は悩んだ。

雄馬「私は、お父さんの時間理論を熟読しました。資料が残って居ましたから…端的に言うと…間違いがあるとも思えるようになった…」

琢磨「ほう〜〜どんなところが…」

雄馬「もし…もしもですよ、過去に戻ることが出来ても…何も変わらないと言うことです。」

琢磨「何も変わらないというのは？」

雄馬「2010年以降…お父さん達は存在しないという事なのです。存在してはいけません。2060年まで…」

琢磨「！！…と言うことは…戻ることは…不可能…？戻れても…消失してしまう？」

雄馬「あくまでも現在までの理論です、ですから工学系を専攻してみました。まだ誰一人時間を越えると言うこと…成し遂げた人は居ない、いや…出来ないのです！！」

琢磨「そうかも知れない…優理子は心の中で私が死んだと思っていたはずだ。タイムマシンを作ればすぐに帰ることが出来る…時間を合わせればいいのだから…それもできず50年という年月を…どう過ごしたか…（泣）」

雄馬「お父さん…母を愛していたのですね～～」

琢磨「勿論だよ…優理子は（必ず帰って来てくれる）と…自分に言い聞かせて頑張ったのだね…チャレンジする価値はある…この身が消え去ろうとも…」

雄馬「…」

琢磨「しかし…雄馬！…時空間ポケットで時間を越えても、私はこうして存在している…自然界で起きるものは、何れ人間にも作り出す事が出来る筈！！この青空…温暖化を克服したではないか！！それと…私たちは現実を生きている。その肉体が戻った瞬間、分解されるわけがない！どういう計算をしたか知らないが…」

雄馬「そうですね…お父さん達は時間を越えた…お父さんが現れるまで…絶対不可能と思って来た…何故不可能と思ったのかは、お父さんの理論を参考に、マシンを作って見たからなんです…でも、作動しない…何かが足りないか…回路の設計が違うのかも知れない…」

琢磨「えっ…と言うことは…」

雄馬「はい、マシン自体は出来ています。お父さんが欲しがっていたチップも最近開発されましたし…しかしプログラムの段階でどこかが違うのかも知れない…」

琢磨「みっ…見せてくれ～～～」と勢い込んだ。

琢磨の研究室に、それはあった！大きさは、6畳間のプレハブ棟くらいの大きさ。

内部には、当時の大型スーパーコンピュータと同程度の処理能力のあるチップが組み込まれているという。

電力も少なくいて済むという理想の物だ。

琢磨は早速、プログラムの検討に入る。

カチャッと研究室のドアが開いて、若い女性が顔を出した。

「父さんただいま…お客様？」

雄馬「優美…お帰り…そう…部屋に戻っていなさい。」

琢磨「お子さん？」

雄馬「そうです…でも…あの子とは…出来れば…あまり…」

琢磨「何故？私の孫娘ではないか…」

雄馬「そうですけど…お父さんは若すぎる…確か27歳…でしたよね…」

琢磨「何を心配している…大丈夫だ。」

そう、もう琢磨の興味はマシンのことで一杯になった。

絶対帰るという信念も芽生えたから。

琢磨は、プログラムの見直しに没頭した。
一週間、研究室に閉じこもる…
食事は、嫁の詩織が運んでくれる。

雄馬が覗いてみると…無精髭が伸びた琢磨が机の上でうたた寝をしていた。

雄馬「お父さん…風邪引きますよ…」

その声で、琢磨は目覚めた。

琢磨「…ああ…寝てしまったか…やっとなどめどが付いたよ…」と、徐に電源スイッチを入れた。

途端に、低いアイドル音が聞こえてくる。

雄馬「おっ！今までは…ウンともスンとも動かなかったのに…お父さん…やりましたね～～」

琢磨「ああ…後は…これに乗って…どうなるか…賭だね。」

雄馬「賭ですか…」

琢磨「その通り…一度死んだと思えば…なんてこと無い…ちょっと空港に行ってくる…一緒に飛ばされた乗員乗客も連れて行かなければならないだろう…」

数時間後、空港ホテルの名前の入ったバスが1台、篠原家の前に止まった。

乗員乗客20名がぞろぞろと降りてくる。

琢磨「雄馬…全員というわけにはいかなかった…この大きさなら…1回で済むだろう…」

雄馬「お父さん…いよいよですね。どうなるか…心配だ…」

琢磨「うん…ここに来てくれた人たちは…この時間旅行の趣旨に同意してくれた方々だ…是非とも過去に戻らなければならない人達で…その他の人はこの時代で進路を見つけていた…この後…すべてがどう変わるか判らない…雄馬、私たちが旅立った後、このマシーンを分解してくれ。時空間を混乱させるだけだ。」

雄馬「判りました。お父さん…私も覚悟を決めます。この世界がどう変わっても…」

琢磨「心配ない、何も変わらないと思う…残った人たちが居るから…では、皆さん、このマシーンの中に入って下さい…ちょっと狭いですが、少しの辛抱です。」

乗客達は、ぞろぞろとマシーンに入った。

琢磨「じゃ！、雄馬…こんな時、なんて声をかければいいのか…色々有り難う…じゃ、行ってくる…」

マシーンの回転数が上がる…「キューーン」と音がした瞬間、アイドル状態に戻った。

雄馬は扉を開けると、誰も居ない。

イグニッションを止めて、マシーンから出た瞬間、地面が揺れたような目眩を感じ、屈み込む。

雄馬『これが…変化の切れ目か？』

エピソード

優美「お父さん！大丈夫？」と声が掛かり、気付いた。

雄馬「おお～優美か～母さんは？」

優美「居間にいるわよ…ふっつ、今日はお爺さまが…帰ってくる日だもの…お土産…何かな～（笑）」

雄馬「えっ！お爺さま？」

優美「そう…どうしたの？お婆さまが亡くなって…傷心を癒す旅に出たじゃない…昨夜、帰ると電話があったわ…」

雄馬は、ビックリした。

雄馬は、居間に走り込み…古いアルバムを出してきて見た。

そこには、琢磨と幸せな顔をした母・優理子が並んで写っている。

幸せな二人と雄馬の成長記録に様変わりしていた。

雄馬『…お父さん…やったね…何も変わらないどころか…最高の幸せが訪れている…』と心の中で呟きポロポロと涙が零れてきた。

それを見た、妻詩織と優美は顔を見合わせ「変なの～？」と呆気にとられている。

夕方、両手に荷物を持った琢磨老人が帰ってきた。

琢磨「ただいま～～」

優美「お帰りなさ～～い、お爺さま～」と飛び出していく。

詩織「優美は、お爺さまが大好きだから…」

雄馬は、父・琢磨の変貌を見てさらに驚愕する…すっかり老人になっている。

あの件のことについて話がしたいと焦った。

雄馬「お父さん！お話が…」

琢磨「ちょっと待ってくれ…みんな…心配かけたね～～もう大丈夫だから…」と仏間に入っていく。

琢磨老人は、優理子の位牌に線香を挙げ長いこと手を合わせていた。

居間に顔を出し、お茶を飲んだ後、雄馬を研究室に誘う…

雄馬は、研究室に入った瞬間愕然とした。

マシーンが無いのである。

雄馬がキョロキョロと見回していると…

琢磨老人が徐に口を開いた。

琢磨「マシーンを探しているのかい？」

雄馬「ええ…」と半信半疑…

琢磨「私が、作ることをやめさせた。もう…不要な物だから…」

雄馬「し・しかし…若い時のお父さんが来た時…」

琢磨「ふっつとうに過ぎ去った時間の事を考えているのか？」

雄馬「あっ…そうか…」

琢磨「なあ…雄馬よ…わしは50年前の出来事…忘れかけている…夢だったような…しかしこれだけは言える…2010年と2060年、両方に接点が存在したと言うこと2010年は自然により出来た物…2060年は人により作り上げた物…今が正常な時間の流れ…にしてしまったのだな～私たち親子で…」

雄馬「と言うことは…」

琢磨「他に沢山の時空間ポケットが存在する。いついかなる時にこの時間が変わるかも知れない、人間が自由に時間を行き来できると混乱する…そんな危険な物を作らせるわけにはいかない。で…作らせなかったのだ。」

琢磨は、もう一つの結論も持っていた。

この一件…すべて時間の流れの中に組み込まれていたと言うことを…誰が決めたわけでもない…気付かないだけで、似たようなことが起きているのかも知れないのだ…

時間の流れ・その許容範囲の広さは計り知れないし…時間という概念に気付いているのは人間だけ…又その時間に振り回されているのも人間なのだ…

<完>